

8月22日 マタイによる福音書13章 24～43節 今日の説教から  
説教題：「目に見えない未来の希望」

私は幼少からあまり植物には興味を示してこなかったため、あまり植物の見分けがつきません。今日の聖書箇所に出てくる「毒麦」という植物も、漠然と「毒を持った麦」というよりも、じっさいに「ドクムギ」という名前の麦があるそうで、それは普通の麦ととても似た見た目をしているようです。おそらく、私が見たところで相当区別するのに苦労するのだと思います。

イエス様が麦の中に毒麦が混ざっているかもしれない、という状況を使って説明したように、私たち信仰者も、すべてが正しい信仰を持っている正しい麦とは限りません。わたしでさえ、自分が誰かに危害を与えてしまう毒麦ではないか、誰かの信仰を妨げてしまわないか、と日々自分を見つめ返しながら生きる必要を感じています。私たちは、自分の心さえ正しいと断言することが出来ませんから、善意で行う行動であっても、常に「本当に神様を証し出来ているか」「誰かにとっての毒麦になってしまっていないか」という疑問の目を、自分に向け続ける必要があるのです。

私たちにはあまり縁のないこの毒麦という植物ですが、実をつけるまでは普通の麦ととても似ていって、気付かずに入れてパンとして食べてしまうことで、まずは手足の痺れや錯乱、幻覚を引き起こすと言われています。そして、最悪死に至ってしまうような、そんな毒を持っている植物なのです。また、ドクムギの親戚にはさらに見た目がよく似た牧草「ネズミムギ」というものがあるそうです。牧草にドクムギが混ざってしまうと、家畜が中毒を起こして死んでしまうこともあります。このような毒性から「ドク」ムギという名前がついているのですが、実際にはドクムギの実自体に毒が含まれているのではありません。ドクムギにカビのような菌がつくことによって有毒な成分が発生するそうです。このカビ、「麦角菌」と呼ばれる菌は健康な小麦にも感染してしまうようなので、ここで言われている「毒麦」とは、そういった感染済みの麦全体のことを指しているのかもしれません。私たち人間に悪魔がささやいて誘惑へと導くように、ドクムギ自体が悪いものではなく、しかし毒を植え付けられた麦は決して他の麦と混ぜてはいけない麦となってしまうのです。

ここで毒麦がたとえに用いられたという事実は、私たちが「不信仰」という毒によって毒麦となってしまう危険性を示しています。カルト宗教の暗躍によって、人間的な欲望によって、習慣や刷り込みによって、私たちは容易に神様以外のものを第一に優先しようとしてしまいます。そうなれば、次は私たち自身が毒麦として誰かの信仰をつまずかせ、滅びの道へ導くことになってしまうのです。

私たちをむしばむ不信仰という毒は、一度かかってしまえばもう二度と癒されることなく、ただただ終わりの審きの時を待ち、燃やし尽くされるのを待つしかないのでしょうか。いいえ、そうではありません。私たちを導くイエス様は、皮膚に現れるカビによって、「重い皮膚病」に苦しんでいる人に触り、罪の赦しと病の癒しを宣言しました。わたしたちのイエス様は、不信仰というカビにむしばまれる私たちに触れて、私たちを元の信仰へと導きだしてくれる方なのです。

私たちの持つ信仰は、目に見える形で保障されているものではありません。本当に審きの時が訪れて、信仰者が救われる時が来る、私たちもイエス様と同じように復活する時が来る、という信仰の「麦」と、「楽しく生きることの方が重要だ」「聖書の言葉は科学的にあり得ない」「復活は起きない」と主張するような不信仰の「毒麦」と、私たちはどちらが正しいのかを、目に見える形で知ることは出来ません。目に見えるものだけを信じてしまいそうになる私たちですが、しかし目に見えない神様の言葉に従う事こそが私たちの喜びであると、私たちは教えられています。2000年前に歩んだイエス様の言葉を、今私たちは信じることが出来ているのです。そしてその真実は、最後の審きの時に私たちの喜びとともに明らかになることでしょう。私たちは目に見えないその希望を胸に、信仰の道を神様に支えられて歩むことが出来るのです。

## 今日の説教箇所：マタイによる福音書13章 24～43節

- 24:イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った。『いや、毒麦を集めると、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』」
- 31:イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」イエスはこれらのことを見な、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかつた。それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「わたしは口を開いてたとえを用い、／天地創造の時から隠されていたことを告げる。」
- 36:それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそばに寄ってきて、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。イエスはお答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」